

# 定置式水平ジブクレーン

## 地域建設業へ広がり

欧州生まれの「定置式水平ジブクレーン」が日本の地域建設業で活躍の場を広げている。職人のための「普段使いのできる道具」によって、自分たちで動かすことが仕事へのやりがいにつながる。機械にも愛着が湧き、安全作業への意識が生まれる。日本式クレーン作業の在り方を大きく変えるとともに、重くて長い資機材を人力で運ぶ現場作業員の負担を軽減するなど、担い手不足や高齢化への対策としても期待が掛かる。



JIBS（定置式水平ジブク

レーン）は、アンカーが必要なく建設現場に常時設置して使用する。専任オペレーターが不要で、スイスやドイツなど欧州の現場では当たり前前の光景として見られる。天井クレーンの講習などの特別教育と設置報告書だけで誰でも動かすことができる。



レーンの活用促進及び建設技能者の働きがい向上技術研究組合（の会員である大竹組（徳島県牟岐町、戎谷一平社長）は、徳島県発注の漁港工事で初めて

職人主体でいつでも自由にクレーンが使える

同クレーンを投入。254個の消波ブロックの型枠組立と解体作業で活用している。玉掛けや吊り荷を近くで目視しながら手元の無線コントローラーで感覚的に操作する。

今回投入したのは、独りープヘル社製の「42K・1/J」。フック高さ13・27m、ジブ長25・5・36mに対応し、最大2・8tまで吊ることができる。50%と60%の両周波数に対応するほか、JIBS規格に適合するなど日本仕様になっている。現場

## “自分の道具”に愛着と安全意識

に搬入してから組み立て・検査を含めて翌日には使用できる。大竹組が16日に開いた現場見学会には、関係者や徳島県建設業協会海部支部会員など約50人が参加した。喜井義典大竹組専務は「まずは1回社員に触らせてもらった。そうすれば、型枠や鉄筋に最適な水門工事が受注できた時にスムーズに使え」と導入した理由を明かす。

同クレーンは、特に鉄筋や型枠などRC構造物で効果を発揮する。思いどおりに操作できる

ので、やりがいや働きがいがあり、魅力にもつながる。クレーンは常に現場にあるので、手配時間の心配がない。さらに、資材置場からトラックでの運搬、現場移動してからの荷下ろしや吊り上げ、組み立てまで全て一人でできるので、職人の多能工化に寄与する側面を持つ。

国交省は生産性向上チャレンジ工事として加算するなど、同クレーン普及へインセンティブ（優遇措置）を設定している。今回の現場にレンタルしたクレーン

レンタル野田（岐阜県神戸町、青木宏文社長）の坂本涼司統括技師は「同クレーンは現場監督でなく、建設技能者のためのものである。（元請けだけでなく）職人にフォーカスを当てて、彼らに利用価値が生まれる制度設計が必要」と言い切る。

見学会に参加した徳島県担当者には「工事成績評価や経営審査での評価から始め、国の動向を見ながら将来的には購入費を補助するなど検討したい」と前向きだ。

